simC News Letter
Sendai International Music Competition
2025年3月号
仙台国際音楽コンクールニュースレター

第９回仙台国際音楽コンクール開催記念コンサート
「優勝者による珠玉のブラームス」演奏評

梅津 時比古（音楽評論家）

第９回仙台国際音楽コンクール開催記念コンサート
「コンクール優勝者による珠玉のブラームス」
日時：2025 年 2 月 15 日（土）14:00 開演
会場：日立システムズホール仙台 コンサートホール
指揮：広上 淳一
ヴァイオリン：中野 りな
曲目：ブラームス／ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 op.77

何ものにもとらわれない表現

コンクールの価値は入賞者へのアフターケアによって決まるところが大きい。

アフターケアとは、コンクールの本選で入賞者が決まり、ガラコンサートなど一連の華やかな行事が終わったあと、主催の組織側が、入賞した演奏家に対してリサイタル、コンサートを企画したり、ＣＤを製作したりして、演奏活動を助成することである。アフターケアが何年も続いていると、参加者も聴衆も、そのコンクールが演奏家を育てているという実感を強くする。

アフターケアの最も手厚いコンクールの一つが、仙台国際音楽コンクールであろう。優勝者に複数のコンサート、リサイタルの機会を提供し、コンクールのライヴＣＤはもとより、準備を十全に整えたＣＤ製作をも企画する。更にコンクールニュースを発行して、演奏家の活動ぶりをきめこまかく伝える。世界のコンクールのすべてを知っている訳ではないが、おそらくこれほどこまやかに優勝者へのアフターケアを行っているところはないであろう。

アフターケアの一環としてのイベントと新年度の第９回仙台国際音楽コンクール開催記念とを兼ねて、「優勝者による珠玉のブラームス」と銘打ったコンサートが、２月 15 日、日立システムズホール仙台コンサートホール（仙台市青年文化センター）で開かれた。

登場したのは、三年前に開催された第８回仙台国際音楽コンクールのヴァイオリン部門とピアノ部門の優勝者、中野りな、ルゥォ・ジャチンの二人である（共演は広上淳一指揮仙台フィルハーモニー管弦楽団）。

曲目はブラームスのヴァイオリン協奏曲ニ長調・作品 77 と、ピアノ協奏曲第２番変ロ長調・作品 83。両者ともに記念のイベントにふさわしい見事な演奏であったが、ここでは特段の成長ぶりを聴かせた中野の演奏を取り上げよう。

中野が前回の仙台国際音楽コンクールにおいて、史上最年少の 17 歳で優勝した際、なによりも輝かしい音色に驚かされた。今回もブラームスの冒頭、曲想を大きく捉えて、張りのある音色を生かす。右手（ボーイング）と左手（指から肘）の運び方には相変わらず惚れ惚れする。

激しく情熱的な冒頭が終わったあと、ひそやかな第２主題で、極めて内面的な思念を表出し得ている。中野のその新しく獲得した音色に打たれた。始まってそこまでの僅かな間に、聴き手をブラームスの構造と抒情に引き込みながら、中野自らを語っている。

第２楽章では、きめこまやかに、粋に歌い、音色がとりわけ生きた。心の内を静かに語るだけではなく、即興性を楽しむかのように、リズム、音色、フレージングをも含めて、さまざまに変化する。すなわち、中野の進境においては、音色だけではなく、一種の逸脱が加わっている。真摯な追求と、遊びの匂いが入り交じり、次から次へめくるめくように新たなフレーズを生み出し、まさに音楽の喜びの坩堝となる。

一方、指揮とオーケストラは構造を押さえることを主としたのだろうが、中野の投げかける意想に、もう少し応えることによって、新たな断面も生まれたように思う。また、ここのホールは非常に音響は良いが、舞台の構造のせいか、どうしてもフルートなども含めて管楽器が強くなりがちな特性を持つ。ホール特性を十二分に意識して、中野のピアニッシモの際には、バランス的に更に気を遣う面も欲しかった。

今回、中野はコンクールの本選より一段と本質的な演奏を聴かせてくれた。それは、中野が演奏の完璧を目指すよりは、楽しむことに重点を置いていたことによるだろう。これは言うは易いが、なかなかできることではない。特に若い奏者は、やはり外形を整えることを目標にしがちだからである。

中野が外形を整えることを第一とはせず、何ものにもとらわれない、より自由な音楽を体現したことに、大きな拍手を送りたい。

■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団　仙台国際音楽コンクール事務局
〒981-0904 仙台市青葉区旭ケ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp

simc News Letter
Sendai International Music Competition
仙台国際音楽コンクールニュースレター
2025年3月号

第 9 回仙台国際音楽コンクール開催記念コンサート「優勝者による珠玉のブラームス」を聴いて

萩谷 由喜子（音楽評論家）

第 9 回仙台国際音楽コンクール開催記念コンサート
「コンクール優勝者による珠玉のブラームス」
日時：2025 年 2 月 15 日（土）14:00 開演
会場：日立システムズホール仙台 コンサートホール
指揮：広上 淳一
ピアノ：ルゥォ・ジャチン
曲目：ブラームス／ピアノ協奏曲 第 2 番 変ロ長調 op.83

2025 年 6 月に開催される第 9 回仙台国際音楽コンクールのプレ・イベントとして、前回第 8 回の同コンクールが生んだ二つの新星、ヴァイオリンの中野りなとピアノのルゥォ・ジャチンが、広上淳一指揮の仙台フィルハーモニー管弦楽団との協演でブラームスの協奏曲を仙台の空一杯に響かせた。

ブラームスには傑作揃いの 4 つの協奏曲がある。ヴァイオリン協奏曲、ヴァイオリンとチェロのための協奏曲、2 曲のピアノ協奏曲だ。だから、ヴァイオリンとピアノの両部門を擁するこのコンクールの覇者たちの記念コンサートにぴったりの作曲家だ。

まず前半では、中野りな独奏によるヴァイオリン協奏曲ニ長調が演奏された。コンクール優勝以後も着実な成長ぶりをみせる中野は、華奢な体つきからは想像もつかない豊かな音量とダイナミックな表現で聴く者を圧倒する。集中力も桁外れだ。この日も、オーケストラ呈示部の間に全身全霊で曲に没入していき、オーケストラが緊張感を高めていったその一瞬に、中身の詰まった充実の音でソロを開始した。オーケストラの合いの手を従えながら高音域まで登ったのち、今度は丁寧に下降する。そのあと改めてソロが示す高い音域での第 1 主題では、清楚かつ甘美な美音がホールに満ちた。たっぷりとした弓遣いで奏でられた第 2 主題には微かなルバートも効いて、そっと甘えるような表情もみせる。

展開部では、交響曲ばりに濃密に書かれたオーケストラ・パートに埋没することなく、凛とした音で弾き進んでいく。マルカートの付点重音主題も決然と奏し、頻出する 9 度、10 度重音も明瞭に鳴らした。小柄でさほど手が大きくないはずの中野が広い音程を正確にとる陰には、人知れぬ努力と鍛錬があったに違いない。ヨアヒムのカデンツァも高い技術で正確に、かつ音楽的に奏された。木管と静かに歌い交わしながら閉じていく楽章結尾も感動的だった。

第 2 楽章冒頭のオーボエ・ソロも、自身がこの楽章へ入り込むための序幕と位置付けてか一心に聴き入って気持ちを高めているようすである。高音で歌い出されるヴァイオリンの主題では、美音に加えてムラのない均質のヴィヴラートが憧憬に満ちた美しい情緒を醸した。フィナーレでは舞曲の躍動感も申し分なく表出され、頻繁に変化するリズムの処理も、3 度、8 度の重音も難なくこなして力強い終結に至った。

弾き終えると、ほぼ満席の客席から嵐のようなどよめきと拍手が巻き起こった。

後半はルゥォ・ジャチン独奏によるピアノ協奏曲第 2 番変ロ長調。コンクールの本選で彼はプロコフィエフのピアノ協奏曲第 2 番ト短調を選び、「この曲のモンスターのようなところに魅了されました。是非ともそれを表現したかった」と語っていたので、今回、ブラームスの 2 曲のうち、ほの暗い情熱の炎が燃え盛る第 1 番ニ短調を弾くのではないか、と思っていたところ、晴れやかな第 2 番だったのはやや意外だった。しかし、始まってみると、調性こそ長調でおおらかな主題から開始されるものの、短調部分も多く、テクスチュアも分厚くシンフォニックなこの曲にも、モンスターが宿っていることに気づかされた。例えば、第 1 楽章が始まってすぐのカデンツァや、展開部の両手が上下跳躍も含めて重音で動き回る部分などである。これらの箇所では、ジャチンの鋼のような強靭なタッチから、決然とした重い音響が立ち昇った。

唯一の短調楽章である第 2 楽章では、ピアノがデモーニッシュなフレーズを駆け上がる。ここにもモンスターが宿っていた。一方、アンダンテ楽章では弦の紡ぐ甘美な楽想に導かれ、ジャチンのピアノが詩情ゆたかに纏綿と歌った。終楽章では主題に躍動感に満ちた生命を吹き込み、後半で圧倒的なクライマックスを築いて貫禄十分に全曲を結んだ。

ジャチンにも中野の時と同様の熱い拍手が贈られ、何回かのカーテンコール。次に中野も登場してジャチンのピアノで、クライスラー『愛の悲しみ』を共通アンコール曲として演奏した。贅沢なデザートだった。